

「教育サービス面における社会貢献」評価報告書

(平成12年度着手 全学テーマ別評価)

秋 田 大 学

平成14年3月

大学評価・学位授与機構

大学評価・学位授与機構が行う大学評価

大学評価・学位授与機構が行う大学評価について

1 評価の目的

大学評価・学位授与機構（以下「機構」）が実施する評価は、大学及び大学共同利用機関（以下「大学等」）が競争的環境の中で個性が輝く機関として一層発展するよう、大学等の教育研究活動等の状況や成果を多面的に評価することにより、その教育研究活動等の改善に役立てるとともに、評価結果を社会に公表することにより、公共的機関としての大学等の諸活動について、広く国民の理解と支持が得られるよう支援・促進していくことを目的としている。

2 評価の区分

機構の実施する評価は、平成 14 年度中の着手までを段階的実施(試行)期間としており、今回報告する平成 12 年度着手分については、以下の 3 区分で、記載のテーマ及び分野で実施した。

全学テーマ別評価（「教育サービス面における社会貢献」）

分野別教育評価（「理学系」、「医学系（医学）」）

分野別研究評価（「理学系」、「医学系（医学）」）

3 目的及び目標に即した評価

機構の実施する評価は、大学等の個性や特色が十二分に発揮できるよう、当該大学等の設定した目的及び目標に即して行うことを基本原則としている。そのため、大学等の設置の趣旨、歴史や伝統、人的・物的条件、地理的条件、将来計画などを考慮して、明確かつ具体的な目的及び目標が設定されることを前提とした。

全学テーマ別評価「教育サービス面における社会貢献」について

1 評価の対象

本テーマでは、大学等が行っている教育面での社会貢献活動のうち、正規の課程に在籍する学生以外の者に対する教育活動及び学習機会の提供について、全機関的組織で行われている活動及び全機関的な方針の下に学部やその他の部局で行われている活動を対象とした。

対象機関は、設置者（文部科学省）から要請のあった、国立大学（政策研究大学院大学及び短期大学を除く 98 大学）及び大学共同利用機関（総合地球環境学研究所を除く 14 機関）とした。

各大学等における本テーマに関する活動の「とらえ方」、「目的及び目標」及び「具体的な取組の現状」については、「教育サービス面における社会貢献に関する目的及び目標」に掲げている。

2 評価の内容・方法

評価は、大学等の現在の活動状況について、過去 5 年間の状況の分析を通じて、次の 3 項目の項目別評価によ

り実施した。

- 1) 目的及び目標を達成するための取組
- 2) 目的及び目標の達成状況
- 3) 改善のためのシステム

3 評価のプロセス

大学等においては、機構の示す要項に基づき自己評価を行い、自己評価書（根拠となる資料・データを含む。）を機構に提出した。

機構においては、専門委員会の下に、専門委員会委員及び評価員による評価チームを編成し、自己評価書の書面調査及びヒアリングの結果を踏まえて評価を行い、その結果を専門委員会でき取りまとめた上、大学評価委員会で評価結果を決定した。

機構は、評価結果に対する意見の申立ての機会を設け、申立てがあった大学等について、大学評価委員会において最終的な評価結果を確定した。

4 本報告書の内容

「対象機関の現況」及び「教育サービス面における社会貢献に関する目的及び目標」は、当該大学等から提出された自己評価書から転載している。

「評価結果」は、評価項目ごとに、特記すべき点を「特に優れた点及び改善点等」として記述している。

また、「貢献（達成又は機能）の状況（水準）」として、以下の 4 種類の「水準を分かりやすく示す記述」を用いている。

- ・十分に貢献（達成又は機能）している。
- ・おおむね貢献（達成又は機能）しているが、改善の余地もある。
- ・ある程度貢献（達成又は機能）しているが、改善の必要がある。
- ・貢献しておらず（達成又は整備が不十分であり）、大幅な改善の必要がある。

なお、これらの水準は、当該大学等の設定した目的及び目標に対するものであり、相対比較することは意味を持たない。

また、総合的評価については、各評価項目を通じた事柄や全体を見たときに指摘できる事柄について評価を行うこととしていたが、この評価に該当する事柄が得られなかったため、総合的評価としての記述は行わないこととした。

「評価結果の概要」は、評価結果を要約して示している。

「意見の申立て及びその対応」は、評価結果に対する意見の申立てがあった大学等について、その内容とそれへの対応を示している。

5 本報告書の公表

本報告書は、大学等及びその設置者に提供するとともに、広く社会に公表している。

対象機関の現況

(1) 機関名：秋田大学

(2) 所在地：秋田県秋田市

(3) 学部：以下の3学部からなる。

1) 教育文化学部(学校教育課程, 地域科学課程, 国際言語文化課程, 人間環境課程)

特徴的事項：本学部は平成10年4月に、それまでの教育学部を改組して、基本的役割である教育界の人材養成を果たしながら、地域の発展に貢献する役割と性格を鮮明にした学部へ再編整備した。そのために教育文化学部は、広く地域社会の発展を教育研究の中心に据えている。四つの課程における教育、社会、国際及び環境等の各々の側面は、地域社会の維持発展にとって不可欠の構成要素である。

2) 医学部(医学科)

特徴的事項：本学医学部の創設には、県民からの地域医療の充実への強い要望が背景にあった。創設以来、多数の本学卒業生が本県の医療に従事しており、設立時の期待はほぼ達成されつつある。創立30年を経過した医学部には今、新たに、県民への最先端の医療の提供、地域に関係ある疾患の予防や保健衛生上の問題点の解明と啓発、さらには、国内トップレベルの少子高齢化への医学的対応などが期待されている。

3) 工学資源学部(地球資源学科, 環境物質工学科, 材料工学科, 情報工学科, 機械工学科, 電気電子工学科, 土木環境工学科)

特徴的事項：本学部は、明治43年に設立された秋田鉱山専門学校から発展したもので、現在資源系と工学系の二つで構成されている。全国的に鉱山は閉山される傾向にあり、地下資源の利用開発自体の意義は減少したが、資源系の学術的蓄積は、21世紀の最重要課題である環境問題をはじめ、資源の有効利用、リサイクル、新エネルギーの開発へと発展している。また、工学系は、全国的な少子高齢化に対応して福祉、バリアフリーなどの新しい社会システムの構築や、高度情報化社会に対応する基盤技術・応用技術の開発、並びにIT時代における新しいものづくりへの対処などの重要な課題を担当している。

(4) 研究科：以下の3研究科, 4課程からなる。

1) 教育学研究科

修士課程(学校教育専攻, 教科教育専攻)

2) 医学研究科

博士課程(構造機能系専攻, 病理病態系専攻, 社会医学系専攻, 内科系専攻, 外科系専攻)

3) 鉱山学研究科

修士課程(資源・素材工学専攻, 物質工学専攻,

情報工学専攻, 機械工学専攻, 電気電

子工学専攻, 土木環境工学専攻)

博士課程(地球工学専攻, 機能物質工学専攻, システム工学専攻)

(5) 教育サービスを行っている附属施設

附属図書館 教育文化学部附属教育実践総合センター, 教育文化学部附属小学校, 教育文化学部附属中学校, 教育文化学部附属養護学校, 教育文化学部附属幼稚園, 医学部附属病院, 医学部附属動物実験施設, 医学部附属実験実習機器センター, 工学資源学部附属鉱業博物館, 工学資源学部附属素材資源システム研究施設, 地域共同研究センター

(6) 学生総数：4,999名

(7) 教員総数：632名

教育サービス面における社会貢献に関する目的及び目標

1. 教育サービス面における社会貢献に関する考え方

(1) 大学の社会貢献活動全体の位置づけ

秋田大学の社会への貢献は以下のように位置付けられる。

1) 国立大学の本来の業務として国民の付託に応えること

特定の地域等にとらわれず、適正に入学させた正規の課程の学生を教育して、教育者、技術者、医学・医療者をはじめとした専門的職業人、あるいは優れた研究者を養成し、国の内外を問わず、広く社会に送り出す。同時に、その一環として、本学が設置されている地域を重視し、秋田県での、専門的職業人、あるいは優れた研究者、の充足等を的確に行う。

2) 地域の中核的な総合的高等教育機関・研究機関として地域社会の要請に応えること

大学及び附属施設等と、大学に所属する教官等の知的財産とを、地域に開放し、そこに住む、正規の課程の学生以外の多様な人々の知的好奇心を満足させる生涯学習や、自己変革・自己研鑽のための多様なニーズに対応し、さらに新たなニーズの創出を支援する。

(2) 本学の教育サービス面における社会貢献に関する考え方

前項の社会貢献のうち、後者がこれに相当する。

1) 本学が教育サービス面における社会貢献を行うことの重要性

本学が位置する秋田県は、産業基盤の脆弱化、少子高齢化が急激に進行して持続可能な社会の危機に瀕している状況にある。そのため、本学には地域社会の再生への支援が期待されている。

2) 教育サービス面における社会貢献活動

大学の持つ総合的高等教育機関・研究機関及び附属施設等のハード面と大学に所属する教官等の知的財産等のソフト面を地域社会に開放し、地域に住む小、中、高校生、職業人、一般社会人など多様な人々の生涯学習を支援する。これを通じて県民に新たな学習意欲を促すとともに、県民と共同で実践しながら新たな地域文化を創造し、持続・発展可能な社会の構築のための支援を行うこと、と捉える。

(3) 具体的な教育サービスの活動(事項と活動形式等)

1) 事項：一般社会人を対象とする教育サービス 活動形式：学内・外で開催する公開講座、講演会及

び各種相談会並びに図書館、鉱業博物館及び体育施設等の地域住民への開放

2) 事項：小、中、高校生など次世代を対象とする教育サービス

活動形式：学外での講演会や小・中・高校への出前講義など

3) 事項：専門的職業人を対象とする教育サービス 活動形式：各種文書配付、講演会及び研究会など

4) 事項：自己変革を求める社会人・職業人を対象とする教育サービス

活動形式：科目等履修生制度及び通信教育講座制度など

(4) 組織的な取り組み状況

教育サービスは、基本的には学部等の内部の組織で立案・実施されているが、その事項と活動内容により学部・附属施設が連携して実施することもある。

2. 教育サービス面における社会貢献に関する目的及び目標

(1) 目的

「本学の教育サービス面における社会貢献に関する考え方」に基づき、以下の目的を設定した。

1) 地域に住む社会人の多様な知的欲求を満足させるとともに、新たな学習意欲を促す。

2) 小、中、高校生の知的好奇心を刺激して勉学意欲を湧かせ、次代の地域を背負う世代の育成を支援する。

3) 職業人に生涯学習の機会を提供し、職業的能力の維持・向上のための自己研鑽を支援する。

4) 職業人の新たな資格の取得や修学の認定の機会を提供し、自己変革とレベルアップを支援する。

5) 大学の附属施設等を開放し、地域住民の知的及び身体的レベルアップと余暇の活用を支援する。

これらを通じて得られる、地域住民の学習意欲を基盤とする、新たな地域文化の創造に貢献することが最終目的である。

(2) 目標

目的達成のために、以下の目標を設定した。

1) 各学部において、地域の社会人を対象に、各専門領域で現在社会的に話題になっている事項等に関する公開講座を実施する。

これにより、地域の社会人が、現代的問題に関する知

識を整理し、認識を深めるとともに新たな問題意識を抱くことにより、学習意欲を促す。また、秋田に住む者の地域の理解を高め、地域のもつ問題点の把握と解決への道筋を考える機会を与える。

2) 各学部において、各専門領域で、小、中、高校生の知的好奇心を刺激するセミナー、各学校への出前講義等を実施する。

これにより、次世代の青少年の勉学意欲を湧かせ、新しい発想を促して彼等の将来を豊かにする。

3) 各学部において、各専門領域の職業人を対象に、最新情報の伝達を含めた研究会及び講演会などを実施する。

これらの生涯学習を通じて、職業人が自己の職業上の能力を維持・向上させるよう促す。

4) 各学部の専門領域に関わる職業人の、他領域を含めた新たな資格の取得や修学の認定のための科目等履修生制度及び通信教育講座制度などを提供する。

これにより、職業人の自己変革とレベルアップを支援する。

5) 大学の附属施設(図書館、鉱業博物館、体育館、運動場等)を地域住民に開放する。

その適切な利用により、地域住民の知的及び身体的レベルアップと利用者相互の新しい人間関係の成立を促す。

これらの目的及び目標の達成のために、教育サービス享受者が以下の諸問題を十分に理解し、解決を模索できるように具体的な活動を設定する。

- a. いじめや不登校等の教育問題
- b. 少子化、人口減少、農業の困難性、産業構造の転換及び情報化等の社会問題
- c. 秋田の国際化に関わる文化・社会・言語の問題
- d. 資源の効率的有効利用、リサイクル及び新エネルギーの開発等、深刻化する環境問題
- e. 医学、医療、保健及び福祉等住民の健康な生活維持のための諸問題
- f. 高齢化に備えた福祉システムの開発やバリアフリー等の新しい社会システムの構築

3. 教育サービス面における社会貢献に関する取組の現状

A. 目的別の取組の内容及び方法

1. 「地域に住む社会人の多様な知的欲求を満足させるとともに、新たな学習意欲を促す」ことを目的とする取組の内容及び方法

(1) 教育文化学部が主体で実施するセミナー

「心の教育」、「親のあり方」、「総合学習」、「新しい教育と附属学校」及び「21世紀の教師に求められるもの」等を主題にした。

(2) 医学部が主体で実施する市民公開講座

「青少年の心が危ない」、「アレルギー疾患の克服」、「脳死と臓器移植」及び「突然死」等を主題にした。

(3) 工学資源学部が主体で実施する公開講座等

「環境問題に関する一般市民フォーラム」その他。研究室の一般公開(オープンキャンパス)

2. 「小、中、高校生の知的好奇心を刺激して勉学意欲を湧かせ、次代の地域を背負う世代の育成を支援する」ことを目的とする取組の内容及び方法

(1) 教育文化学部主体で実施する出前講座、講演会、授業など

「数の話 - 実数論入門 -」、「秋田算数・数学フェスティバル」及び「化学への招待」など

(2) 医学部が主体で実施するふれあいサイエンス

主題は「血液型、DNA、DNA分析による個人の同定」など

(3) 鉱業博物館が行うジュニアサイエンススクール及び子供科学教室

(4) 工学資源学部主体で実施する「地層のできかた秋田の昔(小学校、出前講義)」及び中学生のエレクトロニクス教室

3. 「職業人に生涯学習の機会を提供し、職業的能力の維持・向上のための自己研鑽を支援する」ことを目的とする取組の内容及び方法

(1) 教育文化学部が主体で実施する、公開研究協議会、公開研究会、教育に関連する学問・研究領域の学会、研究会、研修会及びセミナーなど

(2) 医学部主体で実施する、医学医療の全領域が網羅されている研究会及び講演会

(3) 工学資源学部主体で実施する、セラミックス談話会(隔週土曜日、年10回)及び環境教育に関するカリキュラムの開発研究など

4. 「職業人の新たな資格の取得や修学の認定の機会を提供し、自己変革とレベルアップを支援する」ことを目的とする取組の内容及び方法

(1) 教育文化学部主体で実施する、臨床動作法ワークショップ及び同研究会など、科目等履修生の受講の拡充及び教員免許や各種資格に関する講習会

(2) 教育文化学部主体で実施する、心理臨床相談・教育相談

(3) 工学資源学部通信教育講座

5. 「大学の附属施設等を開放し、地域住民の知的及び身体的レベルアップと余暇の活用を支援する」ことを目的とする取組の内容及び方法

図書館、体育施設、鉱業博物館

B. 「教育サービス面における社会貢献」の推進に有用な組織・施設

(1) 秋田大学地域共同研究センター

産学官連携の拠点の一つとして設置された。科学技術相談，大学と民間企業や公的機関との各種共同研究の推進，学術情報の提供と社会への提言などを通して，大学の持つ研究機能や知的資源を地域社会の発展のために活用することを目的に各種事業を行っている。

(2) 教育文化学部附属教育実践総合センター

現代の「いじめ」や「不登校」さらには「きれる」等，さまざまな学校病理現象への対応，生涯学習，少子化及び過疎化に対する学校教育と社会教育との連携強化への積極的対応など，多様化した教育問題に応える組織として設置され，その目的に適合した活動を行っている。

評価結果

1. 目的及び目標を達成するための取組

秋田大学においては、「教育サービス面における社会貢献」に関する取組として、公開講座、講演会、各種相談会、図書館・工業博物館及び体育施設等の開放、小・中・高校への出前講義、専門的職業人を対象とする各種文書の配布や講演会及び研究会、社会人や職業人を対象とした科目履修生の受入れ及び通信教育講座などが行われている。

ここでは、これらの取組を「目的及び目標を達成するための取組」として評価し、特記すべき点を「特に優れた点及び改善点等」として示し、目的及び目標の達成への貢献の程度を「貢献の状況（水準）」として示している。

特に優れた点及び改善点等

小・中・高校生を対象に行っている講演会や公開講座は、専門的事項を日常頻繁に使用する「数」、「算数」、「血液型」などの単語を用いて親近感を持たせる工夫や、出前講義、フェスティバル、ふれあいサイエンス、ジュニアサイエンススクール、子供科学教室やエレクトロニクス教室など、受講者の年齢に合わせて形式や命名においての工夫を行っている点で優れている。

医学部が開催している「ふれあいサイエンス 血液型、DNAの基礎、DNA分析」などの講演会、「秋田県肝胆道癌研究会」、「秋田精神医学セミナー」などの研究会、その他セミナー、フォーラム等は、年間50件ほど開催されており、その主題、内容ともに専門的でありながら日常の話題にもされる社会の関心事を取り上げ、受講者のニーズを反映している優れた取組である。

「秋田大学地域共同研究センター」の「科学技術相談」、「高度技術研修」、「特許講演会」のほか「学生起業家セミナー」、「中学生のエレクトロニクスセミナー」、「産業活性化テクノセミナー」等の取組は、産官学連携の拠点の一つとして行われている一方で、大学の持つ研究機能や知的資源を地域社会の発展のために有効に活用しているなど、その多彩な活動状況は優れている。

教育文化学部の教育実践総合センターが行っている「心理臨床相談・教育相談」、「学校教育相談実践セミナー」、「臨床動作法のワークショップ」などの取組は、「地域の相談活動に携わる指導者を支援し、地域の教育者の実践力向上に貢献する」活動として優れている。ま

た、これら指導者への支援活動を通して、「いじめ」や「不登校」といった教育上の諸問題を抱える市民への援助にもつながるといって優れた取組である。

工学資源学部通信教育講座は、「日本全国の18歳以上の職場の勤労青年を対象に、科学技術に関する組織的な教育活動を行って、学習する者の実力の養成及び知識の向上を図ること」を目的として実施しており、18歳以上で勉学の意志と意欲さえあれば、学歴、地域及び時間等にとらわれず、受講可能な国立大学唯一の文部科学省認定の伝統あるユニークな社会通信教育講座であり、特色ある取組である。また、運営組織も確立され、独自の教科書を作成するなどの工夫・努力を行っている点も優れている。しかし、最近受講生が減少しており、PRの方法やカリキュラムを工夫するなどの点で改善の余地がある。

教養文化学部の平成12年度の「音楽鑑賞講座」、平成12年度「秋田算数フェスティバル」、医学部の平成12年度の公開講座「青少年の心が危ない」、「ふれあいサイエンス2000」など、平成12年度開催の公開講座やセミナーは、社会問題などの話題を各学部の特徴を生かして取り入れられ、充実した内容が提供されている点は優れている。

地域住民に向けた大学の附属施設（鉱業博物館、図書館、体育施設）の開放は優れた取組である。中でも、秋田鉱山専門学校の列品室として発足した工学資源学部附属鉱業博物館は、鉱業関係の文献や岩石、鉱物・化石などの標本の展示、また、ボランティアグループによる館内の案内・勉強会、ジュニアサイエンススクール等の開催など特色ある取組が行われている。

貢献の状況（水準）

取組は目的及び目標の達成におおむね貢献しているが、改善の余地もある。

2. 目的及び目標の達成状況

ここでは、「1. 目的及び目標を達成するための取組」の冒頭に掲げた取組の達成状況を評価し、特記すべき点を「特に優れた点及び改善点等」として示し、目的及び目標の達成状況の程度を「達成の状況（水準）」として示している。

特に優れた点及び改善点等

平成 12 年度開催の公開講座は、各学部の特徴を生かし、充実した内容を提供する努力を行っており、その成果として「音楽鑑賞講座」が 50 人の募集に対し受講者 52 人、「ふれあいサイエンス 2000」が 30 人の募集に対し受講者 37 人と高い充足率が得られている点は優れている。

工学資源学部主催の地域社会人向けの公開講座においては、平成 11 年度開催の「地球一周火山の旅 - 噴火・災害・人類について考える -」は、募集人員 70 人に対して受講者数 38 人、平成 12 年度開催の「地球環境から見た資源リサイクルとハイテク技術」は、募集人員 60 人に対して受講者数 38 人というものもあり、PR 等を工夫するなどの点で改善の余地がある。

工学資源学部附属鉱業博物館は、平成 8 年度は 11,523 人、平成 9 年度は 15,002 人、平成 10 年度は 10,357 人、平成 11 年度は 14,100 人、平成 12 年度は 14,008 人と、毎年一定の入館者数が確保されており、成果が得られている。

達成の状況（水準）

目的及び目標がおおむね達成されているが、改善の余地もある。

3. 改善のためのシステム

ここでは、当該大学の「教育サービス面における社会貢献」に関する改善に向けた取組を、「改善のためのシステム」として評価し、特記すべき点を「特に優れた点及び改善点等」として示し、システムの機能の程度を「機能の状況（水準）」として示している。

特に優れた点及び改善点等

大学として市民対象の公開講座の検討と実施を行う組織であった「公開講座委員会」を平成 12 年に拡大強化し、大学の社会貢献に関わる立案・計画を行う組織として「生涯学習推進委員会」を設置し、社会貢献活動のシステムの中心としての基盤を構築するために努力している点は優れている。

各学部等が行う公開講座、講演会、セミナー及び研究会等は、秋田県各界との懇話会や秋田県教育委員会との連絡協議会を通じて、外部の識者の意見等を活動に反映しており、また、受講者の意見や感想を求めるなどのアンケート調査を行い、受講者の満足度なども分析・把握し、今後の検討に有効に活用している点は優れている。しかし、これらは各学部独自の取組であり、全学的なシステムである「生涯学習推進委員会」の機能を有効に活用するなどの点で改善の余地もある。

目的及び目標に沿って行われている各教育サービスの周知については、報道機関への報道依頼や自治体・企業への通知など、幅広い広報活動が行われているが、大学で行っている活動について受講者や利用者がどのような方法により情報を得ているのかを把握し、フィードバックしていくシステムの構築という点で改善の余地がある。

機能の状況（水準）

改善のためのシステムがおおむね機能しているが、改善の余地もある。

評価結果の概要

1. 目的及び目標を達成するための取組

特に優れた点及び改善点等

小・中・高校生を対象に行われている講演会や公開講座は、親近感を持たせる工夫や、形式や命名においての工夫を行っている点で優れている。

医学部の講演会、研究会、その他セミナー、フォーラム等は、その主題、内容ともに受講者のニーズを反映している優れた取組である。

「秋田大学地域共同研究センター」の取組は、大学の持つ研究機能や知的資源を地域社会の発展のために有効に活用している点で優れている。

教育実践総合センターの取組は、地域の相談活動に携わる指導者を支援し、地域の教育者の実践力向上に貢献している活動として優れている。

工学資源学部通信教育講座は、社会通信教育講座として特色ある取組であるが、受講生が減少しており、PR方法やカリキュラムを工夫するなどの点で改善の余地がある。

平成12年度開催の公開講座やセミナーは、社会問題などの話題を各学部の特徴を生かして取り入れられ、充実した内容が提供されている点で優れている。

工学資源学部附属鉱業博物館は、鉱業関係の文献や岩石などの展示、ボランティアグループによる館内の案内、ジュニアサイエンススクール等の開催など特色ある取組が行われている。

貢献の状況（水準）

取組は目的及び目標の達成におおむね貢献しているが、改善の余地もある。

2. 目的及び目標の達成状況

特に優れた点及び改善点等

平成12年度開催の公開講座は、高い充足率が得られている点で優れている。

工学資源学部主催の地域社会人向けの公開講座においては、充足率が低いものがあり、PR等を工夫するなど

の点で改善の余地がある。

工学資源学部附属鉱業博物館は、毎年一定の入館者数が確保されており、成果が得られている。

達成の状況（水準）

目的及び目標がおおむね達成されているが、改善の余地もある。

3. 改善のためのシステム

特に優れた点及び改善点等

「生涯学習推進委員会」を設置し、社会貢献活動のシステムの中核としての基盤を構築するために努力している点は優れている。

各学部等が行う公開講座、講演会、セミナー及び研究会等は、各学部内で外部の識者の意見等を活動に反映し、受講者の満足度についても分析・把握している点は優れているが、全学的なシステムである「生涯学習推進委員会」の機能を有効に活用するなどの点で改善の余地もある。

各教育サービスの周知については、受講者や利用者がどのような方法により情報を得ているのかを把握し、フィードバックしていくシステムの構築という点で改善の余地がある。

機能の状況（水準）

改善のためのシステムがおおむね機能しているが、改善の余地もある。